

## 夏の夜

宝瓶

深夜、日中はうるさく騒いでいた蝉もすっかり静まり返っている。代わりに蛙たちがゲゴゲコと大合唱している。しかし、太陽が沈み、人々が寝静まった真夜中にヤツが行動を開始した。そう——恐ろしい吸血生物だ。ヤツは本日の獲物を決めたらしく、闇夜に紛れて獲物の家に一直線に飛んでいく。

目的の家は不用心にも二階の窓の一つが全開である。そこから悠々と家に侵入を果たしたヤツは自らの幸運を喜んだ。侵入を果たした一部屋目が寝室だったのだ。本日のヤツによる第一の犠牲者がシングルベッドの上に一人眠っている。眠っている男は見た目から判断して、中学生といったところだろう。

「グゴォー。……ンガッ」

熟睡しているらしく、だらしなくも腹を出し、大いびきをかいて眠っている。そんな男を前にしてヤツは嬉々として喰らい付き、血を吸っていく。ほどなくヤツは男から離れていく。哀れな男は違和感を覚えたのか、寝返りを打つ。が、それだけだ

った。すぐに何事も無かったかのように再び、大いびきをかき出す。

しかし、ヤツはまだ満足していないらしく、次なる獲物を求めて部屋を移動することにした。ヤツは男の部屋を後にすると、人の気配を敏感に感じとり、気配のする部屋へと移動していく。

ヤツが次に見つけた獲物は、ダブルベッドに眠る二人の男女——夫婦だ。ヤツはまずは妻の方へと襲い掛かる。喰らい付き、血を吸っていく。次に夫の血を吸おうとするが、ここで夫が起き上がった。

「……………」

しかし、夫は妻がヤツに襲われていたことにまるで気付かず、寝ぼけ眼のまま、よたよたとした足取りで部屋を出て行こうとする。さらにここで妻も夫が起きたのに気付いたらしく、ベッドに寝たまま夫に話しかける。

「ん——？ どこ行くの？」

「しょうべん……………」

妻の質問に答えた夫はそのまま部屋を出て行った。夫が出て行ってしまったのでは仕方がないとばかりに、ヤツは妻の血をもう一度吸おうかと考え、再度妻に近づくが、ここで妻が起き

上がる。妻は険しい顔付きで部屋の明かりを点け、ベッドの上に座り耳を澄ます。

「……そこかっ！」

妻がヤツのいる方へ両手を伸ばす。これに驚いたヤツは慌てて部屋から退散する。

ヤツが今日はもう引き上げようかと思案しつつ、移動した部屋は又しても、寢室だった。女の子らしいファンシーな部屋の内装をしており、シングルベッドの上には小学生ほどの女の子が体にタオルケットを掛けて、規則正しい寝息を立てて眠っている。ヤツはこの少女を今日の最後の獲物にしようと近づいて行く。

しかし、ここでヤツは突如として、凄まじい脱力感に襲われる。バカな。いったいどういうことだと思っても、体から力は失われる一方であった。とうとう飛んでいることもできなくなり、床に墜落する。

ヤツが薄れゆく意識の中、最期に目にしたのは、煙を出している渦巻き状の蚊取り線香だった。